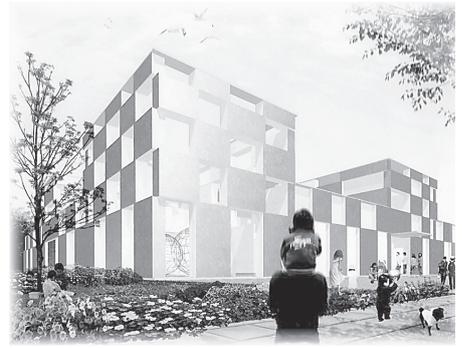


予科練平和記念館だより

平成22年2月開館



予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍、町の歴史に関する資料、体験談などを収集しています。ご存じの方はぜひご一報ください

秋

が深まると木々が紅葉するの、秋の女神である竜田姫が着物の袖を振っていくからなのだ、といういつたえがあります。深く澄んだ青空を背景に、まさに「錦秋」ということばどおり、息をのむように美しく色づく山や木々をみると、竜田姫もきっと、同じように美しい秋色の十二単を身にまといつらつしやるのだろうと勝手に想像してしまいます。茨城にも竜田姫の訪れが待ち遠しい今日このごろ、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

●レポート1
予科練平和記念館の
概要から展示室2「訓練」まで

昭和の初期、『予科練』と呼ばれた少年たちがいました。14歳半から17歳で海軍の飛行予科練習生課程に入り、きびしい訓練を経て飛行機乗りになった彼らは、日中戦争、太平洋戦争における海軍の主力でした。しかし、戦局が悪化してとうとう特別攻撃作戦が行なわれるようになると、

攻隊員となって尊い命を失いました。現在の陸上自衛隊武器学校一帯にあった「土浦海軍航空隊」は、予科練教育の中心地として多くの練習生たちが訓練した場所であり、その敷地に隣接する予科練平和記念館では、予科練の少年たちの歴史を後世に伝え、今と未来を考えていきます。

記念館の外観は幾何学的なシルバーの市松模様ですが、予科練習生たちがあこがれた空を映して刻々と表情をかえていきます。館内は予科練の代名詞となった制服の『七つボタン』にちなみ、『入隊』から『特攻』にいたる7つのテーマ展示室でストーリーが展開されます。

桜並木のアプローチを抜けると、記念館入り口のガラスを通して大きな写真が目に入ります。昭和を代表する写真家、土門拳さんが土浦海軍航空隊で撮影した予科練習生たちの写真です。これに重なるようにして、ガラス面には、予科練の草創期から最終までずっと彼らを見守り続けた教官のことばが刻まれています。その左側には、土浦海軍航空隊のレリーフ。昭和初期、阿見の地にいた彼らの物語は、もうここから始まっているのです。

入り口を入ると、天井の高いエントランスホールの右側に受付があります。ホール左側の壁では、江戸時代から海軍の町になるまでの阿見の姿を写真で紹介しています。写真を見ながらそのまま右へ進むと、常設展示室1〜4共通の入り口スペース、ニューートルゾーン1（左写真）があります。昭和5（1930）



年に横須賀ではじまった予科練教育が、時代とともにどのように変化していったかを紹介しており、周囲には前述の写真家、土門拳さんが予科練習生たちを写した写真が大きく引き伸ばされ、青空を切り取った窓とともに配された印象的な空間です。

予科練習生を模したガラスケースが立ち並ぶ展示室1

『入隊』では、少年たちがどのようにして予科練習生となっていたのか、その状況や入隊までの様子を、映像を交えて展示しています。そして、これまであまり知られることのなかった台湾・朝鮮半島出身の練習生たちについても、貴重な実物資料とともに紹介しています。



続く展示室2（左写真）のテーマは『訓練』。試験を突

破して晴れて航空隊の門をくぐった少年たちには、朝早くから夜寝るまで、分刻みの訓練が待っていました。普通の少年から軍人へ。彼らがどのような生活を送っていたのか、寝起きした兵舎と勉強した教室を部分的に再現した展示室でその実情にせまります。